

---

「あの人があの人が一番可哀想。でも僕が一番可哀想だと思うのは貴女だと思う。～出逢い編～」

永遠+

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「あの人があの人が一番可哀想。でも僕が一番可哀想だと思つるのは貴女だと思つ。～出逢い編～」

### 【ZPDF】

Z9426F

### 【作者名】

永遠十

### 【あらすじ】

新撰組とある乙女の出逢いそれはやはり運命なのかも知れない。

## 第一話（前書き）

新撰組を題材にしていますが、私の勝手な想像や思いなのでそれを御理解頂けたら幸いです。

## 第一話

登場人物

梅：主人公

梅の母

梅の父

新撰組

芹沢 鴨

新見 彰

他

私は今労談を患っている。きっともういいくはないだろう。

あの人死んだと聞いた時も、こんな風に紅梅が咲いていた。

そう、いつもそつだ幼い頃は紅梅が好きだった。

母に

「この花は貴女の花ですよ。」

と言われて、髪につけて、微笑んで頭を撫でてくれたときはとても嬉しかった。

そう、あの時までは大好きだった。

でも、それから8年後に私は親に売られた。父親の酒代の代わりにと。

そして、私は遊廓に連れて行かれた。

その途中で、ある男にぶつかってしまったが、そのまま引き摺られて遊廓に向かった。

その時その男と目があつたような気がした。

その男は少し、驚いた様な顔をしていたように見えた。

そして、遊廓に着いた私は風呂に入れられ、着物を着せられ、店に出了。

私を此処に連れて來た男は言つていた。

「この娘は家柄にしては上玉ですので売るのは勿体無いですよ。それに売るなら高く売つた方が良い」と、

その頃椿にぶつかつた男は考えていた。

酒を飲みに來たのにどうもすすまない、

何故か、さつきぶつかつた娘が気になつてしまつがないので、

仲間達に

「悪いが少し用事ができた、俺は先に帰らせてもらひ、金は置いておくから好きなだけ飲んで帰つて來い。ではな。」

と言い残し去つて行つてしまつた。

残された者達は喜び、てんやわんやの大騒ぎになつた。

その中の一人を除いては、皆に

「あの方がいくら好きなだけ飲んでも良い」と言われても程々にしてください」とお灸をすえた。

その頃男は駆けずり回つて、

娘が居そつた遊廓を探していた。そして店に出てゐる娘を見つけ出し、店主を呼びつけ

「あの娘はいくらだ。」

と男が聞くと店主が、

「いらっしゃると申されても少ない銭では困りますので…」

と言葉を濁すと男は怒り腰にさしていた刀を抜き店主に向けると、

「店主！」と男が武士を懲戒するか、貴様俺を誰だと思つてこらへだ。

」

と怒なり散らすと、店主が怯え、

「すみませんどうか謝りますので」勘弁を。

と主が頭を下げると、男は通じたのか刀をしまい

「で、いらっしゃる娘を売るんだ。」

と聞くと、

「では、このくらいでは如何でしょうか。」

と言つと男は納得したのか、銭を払い娘を連れて店をあとにした。

娘と男が帰る途中娘が、

「どうして、私を引き取つたんですか？」

と聞くと、男は「コッ」と笑つて

「なんとなく。」  
と言つと、

「なんとなくで人を引き取るんですか？」と娘が言つと、男は  
「俺といるのが嫌ならこの手を離せば良い、そうしたらお前は自由  
だ。何処にでも行けば良い。」

と言つと娘は心中で、この人は私が何処にも行けないことを知つ  
ていてこんな事を言つているんだ。

だから全てを見透かしたような、何喰わない顔で私を見てるんだ。  
と思った。

そして男がじーっと娘を見つめているので、

解りきつて従つのは少し腹が立つので、ムスッとして顔を反らした。  
すると男が何か言い出さうとしたとき、

男の傍に誰か近づいて來たので、

娘はサッと男の後ろに隠れた。するとその男が

「芹沢先生何処行つてたんですか？勝手な行動は控えてくださいと  
いつも言つているでしょ？」

と言つと男は

「やう言つなや今日はもう疲れたんや、もう帰つて寝る。後は頼む  
わ

と言い娘を後ろから引き摺り出し

「やうやこいつの事頼むわ。やうこや名前聞いてなかつたな何てい  
うや

と三つと娘は、

「梅です。」

と三つと、芹沢が

「やうか。梅いうんか、良い名前やな。」

と言い梅の頭を撫でた。そして、

「俺の名前は芹沢鴨や、ほんで此方は新見彰、他にもあるさやけど  
後は知らんでええわ。新見、他の奴には言つなよ  
」  
と言ひ歩き出した。

梅は芹沢にくつつき顔を隠して共に歩き出した。

それを見ていた新見彰は不信に思い、

一人考えていたが、梅に向かって走りだし、

「女、なぜ名しか名乗らん。」

と言ひて肩を掴むと梅は、

「私には名しかありません。親に捨てられたのです。もひ思ひ出しあつてもあつません。」

と新見の手を振り払い着物で顔を隠し震えていると、新見は啞然とした顔で

「すまんかつた」

と言い芹沢は

「新見もう解つたんなら梅に手え出すなよ。なんぼこいつが別嬪じや言ひても梅は俺のもんやからな」

と言ひと新見は、

「そんなんじやありません。ただ何処のもんか分からんかつたら困る思ただけです。」

と言ひてうしろに立てる間に屯所に着きました。

これが私とあの人との出逢いでした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9426f/>

「あの人があの人が一番可哀想。でも僕が一番可哀想だと思うのは貴女だと思う。～出

2010年10月28日03時11分発行